



写真◎新井卓

40年以上の長きにわたり、 日立と地域を結ぶ「青森ねぶた」

夏宵に舞う、迫力のねぶた

祭りの開始が近づくにつれ、「リンリン」「シャンシャン」という音が次第に大きくなり、まだ明るさの残る宵の空を満たしていく。ねぶたの前後で飛び跳ねながら踊る「跳人^{はねと}」たちの浴衣につけられた鈴の音だ。まるで蟬の鳴き声のように、街中に鈴音が鳴り響き、沿道があふれんばかりの人で埋め尽くされたころ、ようやく祭りの始まりを知らせる火花が打ち上がった。

他のねぶたはすでに灯りをつけているのに、目当ての日立連合のねぶたは暗いまま。不思議に思っていると、腹に響くような力強い太鼓の音に合わせて、ねぶたの山伏の顔、鬼の顔、鬼の口から吐き出す炎といった順に、パッパッと灯りがともっていく。粋な演出に、思わず鳥肌が立った。灯りがともると、赤は燃えるように赤く、青はより澄みわたり、それぞれの色が際立って見える。その大きさは、横9m、奥行き7m、高さ5m。目前に青い顔の鬼が近づいてきて睨み^{にら}をきかされ、思わず後ずさってしまった。

8月2日から6日間にわたって行われる青森ねぶた祭も、この日で4日目。日曜で人出が多いだけでなく、今日の運行の後に、大型ねぶた全22台のなかから、優秀なねぶた上位5台の賞が決まる日とあって、最高潮に盛り上がっていた。

跳人たちの「ラッセラー、ラッセラー」という掛け声、お囃子の太鼓や笛、手振鉦^{てぶりかね}の「カシャンカシヤ



ン」という音が入りまじるなか、4 kmほどの運行コースを、趣向を凝らしたさまざまなねぶたが練り歩いていく。4 tもあるねぶたが客席に近づいて見得を切ったり、くると回ったりするさまはまさに圧巻だ。

「ねぶたと聞けばじっとしてられませんよ、そりゃもう。祭りのために一年間がんばっていると言ってもいいくらい。青森の人にとってねぶたは特別なものですからね」と言っていた、日立連合の竹谷和春（日立製作所東北支社 青森支店）の言葉が、祭りに来てみてすんなり理解できた。

「日立連合」のねぶたを支える人々

実は日立連合ねぶた委員会は、1965（昭和40）年から青森ねぶた祭に参加していて、今年で42回目を数える。一社グループだけですべてを賄い、さらに「凱旋太鼓」と呼ばれる大型太鼓も持つ。「日立のねぶたはすごい」と羨ましがられるほどで、一昨年と昨年、2年連続で市長賞を受賞している。賞に値するねぶたには、ねぶた本体がいいことはもちろんだが、運行、跳人、お囃子と、すべての要素がそろっていないといけない。当然ながら地域との密な関係が不可欠だ。

まず第一に重要なのが、ねぶた師。ねぶたの良しあしはねぶた師の腕にかかっているといっている。というのも、ねぶたの設計図はねぶた師が描く一枚の下絵のみで、後はすべてねぶた師の頭の中に入っているからだ。イメージどおりに所定の大きさの中に骨組みを入れ、灯りがともった状態をイメージしながら色をつけていく。ちなみに、



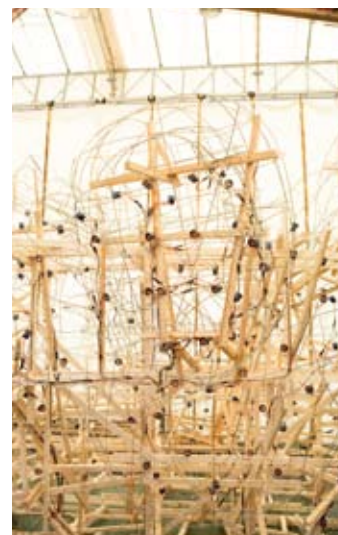
ねぶた師に專業はいないという。本業の傍ら、約半年にわたって青森港に臨む「ねぶた小屋」と呼ばれる作業所に通いつめ、つくりあげていくのだ。5月下旬、制作途中のねぶたを見学に、ねぶた小屋を訪れたときには、木組みと針金だけの状態で、素人の目には、ほとんど形がわからなかった。その小屋で、黙々と作業をしていたのは、4年前から日立連合が依頼している北村蓮明氏。ねぶたの神様といわれた北川敬三氏に幼い頃から師事し、大型ねぶたでデビューしてから30年になる大ベテランだ。

今年、北村氏が描いたテーマは「道成寺」。ねぶたで最も映える色である赤い炎と、最も発色が難しいとされる青色をした鬼の顔で勝負をかけた。

「一番力を入れるのは、面ですね。ねぶたは顔が命ですから。だから、面の部分だけ、師匠から譲っていただいた古い手漉きの和紙を使うのです。色の滲み^{にじ}が新しい紙とは全然違うんですよ」と北村氏。明るい蛍光灯を使う団体が多い中で、あえて電球を使ったのも、伝統の色へのこだわりからだ。

そのねぶたをより勇壮に見せるのが、囃子方の役目である。日立の囃子を担当するのは、昨年も囃子賞を受賞した「凱立会^{がいりゅうかい}」の面々だ。軽快な笛に一糸乱れぬリズムで刻む迫力の太鼓——基本的な節回しは同じなのに、素人が聴いていても他の団体とは明らかに違うのがよくわかる。

「実は、囃子方というのは、派遣のように祭りごとくに団体を渡り歩くというのが普通なんです。そうしたなかで、私たち凱立会は日立専属になって今年で4年目。伝統のある憧れの日立連合で、しかも専属できるというのは身の入り方が違います」とは、凱立会会長の田中潤一氏の言だ。



映像による日立グループのご紹介

HITACHI NOW

<http://www.hitachi.co.jp/now/>

「青森ねぶた 2007 第1章・第2章」もあわせてご覧ください。

日立連合のねぶた師、
北村蓮明氏

伝統を守り伝えていく者の 責務と誇り

その日の深夜遅く、審査の結果が出た。日立連合ねぶたは総合4位にあたる商工会議所会頭賞を受賞。日立連合の凱立会は今年も見事に囃子賞を受賞。祭りの最終日は、選ばれたねぶただけにその栄誉が与えられる、海上運行も果たすことができた。

だが、賞をもらうことだけがすべてではないと、日立連合会長の小野由則（日立製作所 東北支社 青森支店支店長）は言う。

「日本が誇る重要無形文化財の火祭りである青森ねぶたに、日立が参加し続けるのは、もちろん宣伝効果への期待もあるけれど、それだけではありません。私どもの願いは、祭りを通じた地域貢献にあります。ねぶたを題材にした子供たちによるぬり絵コンテストや、清掃ボランティア活動の実



日立連合会長・小野由則



凱立会会長を務める田中潤一氏

施もその一環なんです。

また、日立グループとしても、参加当時から青森販売所はもちろんのこと、日青家庭電気（現日立コンシューママーケティング）、青森日進電機（現奥羽日立）、日立レントゲン（現日立メディコ）、日立建機などが集まって、グループ一丸となってこの祭りにかかわってきました。祭りはグループをまとめる求心力ももっているんですね」

確かに、実際に祭りを体験してみると、宣伝や地域貢献などという言葉だけではとうてい片付けられない、もっと大きな地域との絆のようなものを感じる。業務の傍ら、ほぼ1年かけて準備を進め、人を集め、半被（はっぴ）を用意し、ポスターやチラシをつくり、当日は運行をサポートし、祭り全体を盛り上げていく。一朝一夕でできることではない。

「日常の業務との両立も大変ですが、単なる協賛という形ではなく、自らの手で地域と一体となって祭りをつくりあげていくのは苦労も大きいけれど、喜びも大きい。ねぶた小屋でもうちが一番賑やかなんじゃないかな（笑）」（竹谷）

そういう結びつきがあるからなのだろう、日立さん〴〵と地元の人たちから親しみを込めて呼ばれている場面を何度も目にした。

さらに、日立連合の囃子方の凱立会は、伝統的な「正調囃子」を継承する団体で、これを普及していく役割もある。そうした文化芸能を後世に伝えていくための手伝いをするのも、日立の重要な役目だと小野は言う。

小野と竹谷の言葉に滲む、40年の長きにわたって続けられてきた活動に対する責務と誇り。それは、この祭りにかかわるすべての人の思いでもあるのだ。